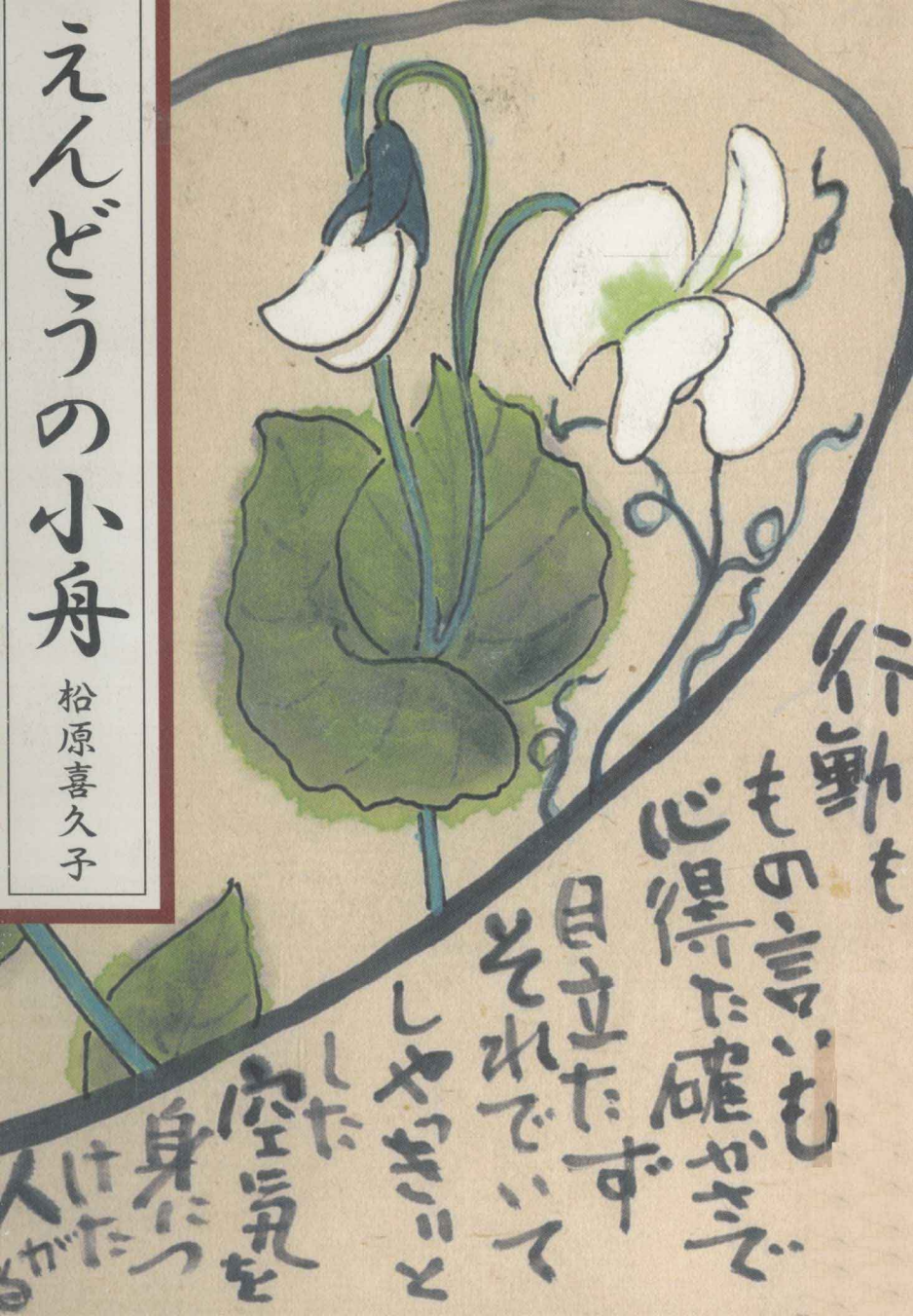


えんどうの小舟

松原喜久子



行動も

もの言ひも
心得た確かきで

目立たず
それで

しやきいと

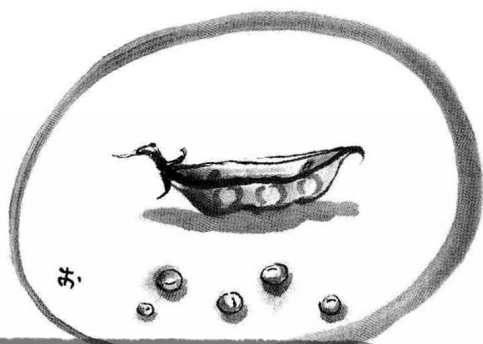
した

空気を

身づ

人け

え



松原喜久子

旧満州国撫順市に生まれる。大家族で育ち、家庭を持つてからも、姑や義理の妹など大勢の中で暮らす。

子育てのなかで児童文学と出会い、自らの体験を昇華させた「ひみつシリーズ」を完成させる。

最近では、現代の生活を凝視し、心に去来するあれこれを綴り、「残り時間」を楽しんでいる。

主な作品に、『鷹を夢見た少年』（文溪堂）、『おばあちゃんのひみつ』『おひなさまのひみつ』『あの海のひみつ』『時のとびら』（KTC中央出版）など。

日本ペンクラブ、中部児童文学会会員。



えんどうの小舟

●

2001年11月6日 初版発行

2001年11月28日 初版第2刷発行

著者 まつばら きくこ
松原喜久子

発行人 前田哲次

発行所 KTC中央出版

〒460-0008

名古屋市中区栄1丁目22-6ミナミビル

TEL052-203-0555 振替00850-6-33318

〒163-0230

新宿区西新宿2丁目6-1新宿住友ビル30階

TEL03-3342-0550

表紙・本文デザイン 田中悦子

印刷 図書印刷株式会社

目
次



えんどうの小舟

一——あのころのこと

母のカップケーキ	42	イナゴ捕り	38	こよりひも	33	えんどうの小舟	28	いたずらの養分	23	秘密をもった日	19	草野球	14	また道草して	9	汽車	6
----------	----	-------	----	-------	----	---------	----	---------	----	---------	----	-----	----	--------	---	----	---



二——まじわりさまざま

共白髪	92	名は「きく」	88	おお痛い！	85	使わずじまいの奥の手	82	わが家の竹取物語	79	愛情の順位	76	好物ベスト3	73	父親の出番	70	こぶしの下ろし所	66	孝行息子	63	働き者の勲章	60	私の呪文	56	できんもんに出会う	52	ほめ上手	48
-----	----	--------	----	-------	----	------------	----	----------	----	-------	----	--------	----	-------	----	----------	----	------	----	--------	----	------	----	-----------	----	------	----

三 — 変わりゆくこと

化石の人	自動販売機	ハレの時	のりづけの記憶	櫛	風鈴の音	そよ風の人	花盗人	百科事典の行き場	マツチ	迎え傘	増え続ける写真	加減が消える
137	134	131	127	123	120	117	114	109	106	103	100	96

えんどうの舟

四 — そして、いま

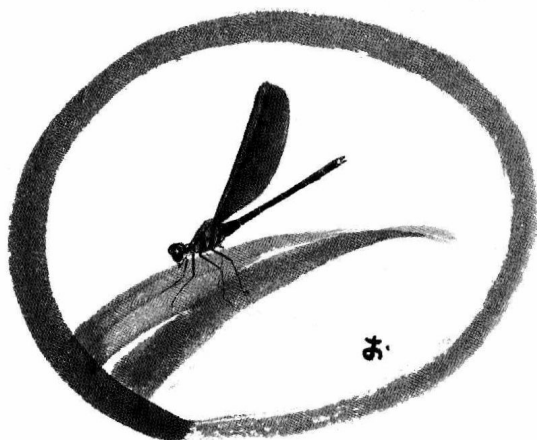
住所録	三途の川を渡るには	残り時間	暮らしの許容範囲	年月をかけた微調整	激励には叱咤を	洗髪	雑巾を刺す	恋文	待ちわびる楽しみ	京都東福寺	季節の食器
176	173	169	166	162	159	156	153	151	148	146	142

装画・插画 大島國康

一

あのころのこと

・



汽車

戦後、私が子ども時代を過ごした家は、伯母の持ち家ながら、一軒家であった。

二階の西側の低い腰窓からの眺めは、見はるかす田んぼであった。田というよりも「田んぼ」というのがぴったりで、その先に、東海道線の汽車が走るのが見えた。

むろん、先頭を蒸気機関車が引くSLで、編成は何両であったか、子どもの目に、それはそれは長かった。

田んぼは、浅い春にはれんげのじゅうたんが敷きつめられ、やがて田起こしの後、ほっこりとした土の色となる。田植えの済んだ頃は、緑も若く、張った水が風に揺れて、きららと光った。

蛙かわずの音を聞くのも、この頃であった。

汗をかく頃ともなると、濃い緑一色となる。

その間の畦^{あぜ}を、伯母の家までもらい風呂の行き帰り、足もとから、夏草のむれる匂いが立ち上がっていた。

暑い日の夜、小さな庭に打ち水をするが、あの匂いは戻らない。

秋風が立つと、田んぼは黄金色に変わって、重くなった穂が、大きくうねった。

晴天の夕方は、私のいちばん好きなときで、夕陽が、汽車の長い列の後ろに落ちていった。

隠れる前の太陽は、燃えるような赤となり、昼間より大きく見える。

その姿が見えなくなっても、濃い紫に変わった空には、夕焼けに染まった雲が残っていて、私の頭上の雲も、だんだんとそちらに引っぱられるように移っていくのがわかった。

その頃、手前の田んぼは、はや闇となり、昼が夜に飲み込まれていくのだと思ったことがある。さつきまでは、煙を吐く黒い影であった列車も、夜の帳^{とばり}となると、灯りの帯となって流れて過ぎた。

貨物列車の長い列も、客車よりガタゴトの音が大きくて、聞きごたえがあった。

あの頃は、騒音などといって、音を気にすることもなく、ときどきの物売りの声、遊ぶ子どもの声、鉄筋も鉄骨もない木造住宅の普請の金槌、鋸の音も、心和む友であったと思ひ出す。

一日に何度眺めても飽きない汽車。

大人になれば、あれに乗って行くことができると思った日の東京は、遠かったが憧れの地であった。

今は、新幹線で日帰りもするが、あの日のような憧憬せうけいの地ではない。

ガタゴトと規則的なレールの響く音、吐く煙、とき折りの汽笛、みな懐かしい。

一直線の長い列が右から左、左から右へと目の先遠く、田んぼを隔てて過ぎるのは、思い出しても心が晴れる。

過日、あの日に帰りたいくて、当時の場所を訪れたが、田んぼはすっかり消えて街となり、大駐車場完備の大きなスーパーマーケットができていた。

何もかも、遥か遠い日の幻となって、幻はいつそう美しくなる。

また道草して

子どもを送り出すときにかける言葉も、時代によって、変わっているような気がする。近ごろは、

「道草をしないで」

の言葉をあまり聞かない。

今は、子どもたちも忙しくて、道草の時間も場所もないのだろうか。

目を閉じる。

「○○○ちゃん、こっちこっち」

「ほら、見て見て」

「あっ！」

護岸工事のない川。

そこから田に引いた水路。

のびた夏草。

まだ花芽をつける前の、水辺に垂れてしまった、萩の枝のお羽黒トンボ。

わたしたちは、下駄を脱ぎ、土を踏み、草を分け入る。

粟あわのようなつぶつぶのついた草を抜いて、水面に垂らす。

びよわん

と穂先に跳びついて、カエルが釣れた。

歓声。

ささやき。

追って追われて、スカートの裾、ズボンの足もとが濡れた頃、誰かが声をかける。

「帰ろうか」

日焼けした顔に泥まではねて、道端にうち捨てておいたカバンをつかむ。

「またあした」

「またな」

などと、四方へ散るが、「バーイ」とか「バイバイ」という言い方はなかった。

あるとき、一緒にいたのは誰かしら。

「また、道草してきて」

節をつけた母の声は毎度のことで、あの頃は、元気で遊べば、親も子も幸せであった。

集団登校も集団下校もなかったが、上級生は頼もしく、私たちは後に従って歩いた。

「道草しないで」と、毎日のように言われたが、どこを歩いても楽しいことがいっぱい、私は道草の常習者。仲間もたくさんいた。

春は、つくしを摘み摘み歩き、オタマジャクシもメダカも追った。

夏草が繁つてくると、オオバコの茎で力競べちからけいべをしたり、カヤツリ草でカヤを作ったり、草をくわえて鳴らしたりもした。

シヨウリヨウバッタもトノサマバッタも、足もとを跳ねて、男の子のポケットの中にも入っていることがあった。

ジャンケンで勝った者が、次の電信柱までカバンを持ってもらえる遊びもあったが、知恵のある子の、お坊さんに出会ったら交替という提案で、私は最後までふたり分のカバンを持ったことがある。

夏休みの遊びの相談も、虫捕り、魚捕り、誰の家、どここの場所にとにぎやかであったが、親類への長期逗留がうらやましいほどで、海外旅行などは、存在すら意識になかった。

二学期、運動会の練習が始まると、下校も遅くなつて、つるべ落としの西陽を追いかけて、帰り道までかけっこ。かける足もとを、疲れた草の匂いが、風に運ばれていた。

途中に普請の家などであると、帰り仕度の職人さんが、

「子どもはよう帰れや」

と、太い声をかけてくれたりした。

寒い冬も楽しみは多い。

霜柱を踏むための早起き、早登校。

雪の日は、雪合戦の楽しみも増えて、道草は行きがけから始った。

中でもいちばんの楽しみは、道端の焚き火への参加。わかることわからないことが半ばしたが、大人の会話の仲間入りは楽しくて、

「寄ってあたっておいき」

の声が、

「遅れるよ」

と変わると、名残り惜しかったものだ。

おつかいの途中、かじやさんのフイゴの前は、格別楽しい場所で、頼まれた豆腐が遅くなった日、

「また道草して」

の母の声には迫力があつた。

ああ、どれもこれも、誰も懐かしい。

道草のあれこれは、目を閉じると戻る、私の玉手箱。

草野球

孫とのキャッチボールは、母親より上手い。

公園の隅で、小学生の孫を相手にしていると、

「おばあちゃん、たいへんですねえ」

と、^{ねがわ}労いの言葉を頂戴する。

どういたしまして。

最近、体力とともに、相手の腕が上がってきたが、グローブの使い方から教えたのは私だ。
最初は、

「おばあちゃん、ちゃんとぼくのグローブの中に投げてよ」

と、真面目な顔。